

A rectangular box with a black border, containing a 'Data' section. At the top left is a small clapperboard icon, and at the top right is a pushpin icon. The text is as follows:

Data
監督: マイケル・エングラール
出演: ヒュー・ボネヴィル/ローラ・カーマイケル/ジム・カーター/ラクエル・キャシディ/ブレンダン・コイル/ミシェル・ドッカーリー/ケヴィン・ドイル/マイケル・C・フォックス/ジョアン・フロガット/マシュー・グッド/ハリー・ハデン=ペイトン/ロブ・ジェームズ=コリアー/アレン・リーチ

■ショートコメント■

◆『ダウントン・アビー』は英国北東部の壮麗な大邸宅「ダウントン・アビー」に住むクロリー家とその使用人たちの生活を描いたイギリスの人気ドラマで、ゴールデングローブ賞やエミー賞に輝いたもの。本作はその人気ドラマを映画化したものだが、最終回から2年後のクロリー家を描くものらしい。

私は、近時『ミーユエ〜王朝を照らす月〜』、『三国志〜Secret of Three Kingdoms〜』、『独孤伽羅〜皇后の願い〜』等の華流ドラマに凝っているが、20世紀初頭のイギリスの貴族ドラマには格別興味はない。しかし、新聞紙評を読む限り、それなりの重厚な人間ドラマとしてそれなりに面白そうなので、一応観ておくことに・・・。

◆新聞紙評では、「華麗な衣装、豪華な美術の中、多くの人生が重なり合う脚本が見事。ただ人間関係が複雑なので、ドラマを見ていない人には予習をお勧めする。」と書かれていた。そこで、公式サイトを調べてみると、その人物相関図は、次のとおりだ。

英国王室



ジョージ6世

夫婦



メアリー王妃

親子



ラッセルズ卿

夫婦



メアリー王女

侍女

メイド



ルーシー・スミス



モード・バグショー

クローリー家



バイオレット
先代グランサム伯爵夫人

親子



イザベル・マートン
メアリーの亡夫・マッシュウの母

夫婦



マートン卿

従姉妹



グランサム伯爵
ロバート

夫婦



グランサム伯爵夫人
コーラ

義弟



トム・ブランソン
クローリー家の亡き三女・ソピルの夫



夫婦

ヘンリー・タルボット



長女 メアリー



次女 イーディス

夫婦



ヘクサム卿

クローリー家 使用人



元執事 カーゾン

夫婦



家政婦長 ヒューズ



伯爵付従者 ベイツ

夫婦



メアリー付侍女 アンナ



執事 トーマス



料理長 パットモア



料理長助手 デイジー



下僕 アンディ



下僕 モールズリー

また、その集合写真は次のとおりだ。



◆もっとも、本作では冒頭に要領よく複雑な人物関係の説明がされるので、予習は不要だった。冒頭のスクリーンいっぱい広がる「ダウントン・アビー」はたしかにお見事だが、これだけの大邸宅を維持していくのは、人件費を含めて莫大な費用がかかるはず。昔の貴族は平民からの搾取によってそれをまかっていたが、近代民主主義国になったイギリスでは貴族の特権は弱くなっているから、この大邸宅の維持は基本的にムリだろう。

他方、イギリスは「開かれた王室」が売りだが、本作を観ているとそうでもないようだ。だって、本作のテーマは、クローリー家に一泊して壮大なパレードに参加し、また、豪華な晩餐会を開くことになったジョージ5世国王とメアリー王妃を迎えるところから生まれるさまざまな確執(?)を描くものなのだから。

◆本作の膨大な登場人物は、支配階級とその世話をする被支配階級に分かれるが、本作はその被支配階級、つまり、執事や料理人、家政婦たちの目から描かれるところが面白い。しかし、同じ被支配者階級であっても、クローリー家のそれと、王室のそれとはまた大きな違いがあるらしい。そこで起きるのが、クローリー家の被支配者階級 vs 王室の被支配者階級との確執(対立)だ。

本作は、それを興味深く描いているが、同じ権力闘争を見る（楽しむ）のなら、私はやはり英国ドラマよりも華流ドラマにおける宮廷の権力闘争や女同士の嫉妬争いの方がよほど面白い。したがって、本作は大ヒットしたテレビドラマをそれなりの映画に仕上げているものの、所詮それだけ・・・。

2020（令和2）年1月23日記